opusdei.org

属人区長の書簡 (2012年7月)

ハビエル・エチェバリーア司教は、今月の手紙において、 がりについて、すなわち不安の中にあっての神への委託 と、隣人-ことに教皇-のための祈願とについて取り上げる。

2012/07/07

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに! 先月の28日に、愛するドン・アルバ 口の英雄的な諸徳を承認するという 聖座の発表を聞き、私たちは皆、主 への感謝と喜びに満たされま。本当 に大きな喜びでした。というのも、 この事実によって、創立者の最初の 後継者であるドン・アルバロが徹底し て忠実に生きたオプス・デイの精神 を教会が再び承認したからです。オ プス・デイの精神とは全面的に福音 の教えに適ったものであり、それゆ え、尊者への信心の祈りにあるよう に「日常生活のあらゆる状況を、神 を愛しイエス・キリストの王国に仕え る機会に しする道だからです。

Grátias tibi, Deus, grátias tibi!「感謝します、神よ、感謝します」と何度も繰り返すよう勧めます。「福音のように古く、福音のように新しい」[i]賜であるオプス・デイの精神をお与えくださったことを、また、他の多くの人々が、オプス・デイの召し出しはなくとも、何らかの形で

私たちの超自然的な家族に加わっていることを、至聖三位一体に感謝しましょう。私たちの家族や友人、知人の多くが、創立者が神から託された精神に従って歩もうと日々努めているからです。

先日来、私の誕生日にあたって届い た手紙を読むたびに、心から主に感 謝しました。主は教会の部分を成す オプス・デイは、その教会と同じよ うに家族であること、つまり、父子 (おやこ)の精神、兄弟の絆で結ば れた超自然的な家族であるようお望 みになりました。私はすぐに、その 祝日を祝ったばかりの愛する創立者 を思い起こしました。聖ホセマリア に感謝すべきです。オプス・デイ固 有のこの家族的な雰囲気は、創立者 が神のみ旨にどこまでも忠実に応え たおかげだからです。私たちの日々 を彩るさまざまな祝日には、この家 族の雰囲気がいやが上にも強まりま す。最近のこれらの日々に、皆さん

と多くの方々が私のために祈ってくださったことに心から感謝し、皆さんのためにもっと祈ることでお返ししたいと望んでいます。

教皇ベネディクト十六世が示してく ださった愛情溢れるお祝いは、私に とって、子としての特別な感謝と喜 びの元となりました。私の誕生日に 際してお送りくださった祝辞をした ためた手紙において、教皇様は、属 人区長のための祈りと、その司牧の 下にある全ての人たちへの特別な使 徒的祝福を確約してくださいまし た。教皇様が示された愛情に対し て、私たちは深い責任を感じ、教皇 様ご自身とそのご意向により固く一 致し、最高の牧者としてのその統治 が実り豊かなものであるよう祈り続 けなければなりません。

キリストの代理者に関して、度々、 耳にした創立者の言葉がよく理解で きます。こう言っておられました。

「心から教皇様を愛しなさい。心を 込めて教皇様のために祈りなさい。 教皇様を本当に心から愛することで す。全ての子供たちの愛情が必要だ からです。私にはそれがよく理解で きます。自分の経験から分かるので す。私は壁のような存在ではなく、 人間だからです。ですから、教皇様 に、私たちが教皇様を愛しているこ とを、いつも愛していることを知っ ていただきたいのです。愛する理由 は唯一つ、地上における甘美なキリ ストであられるからです。」[ii] 毎 日、聖ペトロの後継者のためにどれ ほど祈っているでしょうか。私たち の忠実は、教皇様の信頼に見合って いるでしょうか。

創立者の心にはいつも教皇様への愛が力強く脈打っていました。オプス・デイが未だ土の中に埋もれた小さな種だった頃の古い手紙の中で、教皇様と共にロザリオを唱えていると考えるのが好きであったことや、

霊的聖体拝領を唱えるときには、教 皇様の手からご聖体を拝領している と想像していたことがしたためので ています。教皇様への愛を、、小さ うに〈実体を持つ〉ほどに、小つさ うにとを通して細やかに実行した 地上のキリストの代理者、全キり ト信者の父親に対する、 した神学的な深い愛情を培ってした。 たのでした。

このことを思い出したのは、7月には、創立者が教皇様との最初の謁見に臨んだ日を記念するからです。最初のローマ訪問の3週間後の1946年7月16日ことでした。そのローでした。そのロースとは、イウローでは、他側ができるでは、イーニをではです。というでは、で喜びをがいる。その際にいたちにといる。「く聖十字架司祭とした。」というというにはいる。

オプス・デイの創立者 > のための教皇様自筆のサインを持っています。何と思いがけない喜びでしょう。何度も何度も接吻しました。」そして、「祈りを疎かにすることなく、心から喜んでいるように。」[iii]と追伸に加えられました。

教皇様のため、教皇様ご自身とその 意向のために祈ることは、創立者の 遺言であり、また最初の後継者ド ン・アルバロが模範的な忠実さで伝 えたことでもあります。このカト リックの精神が皆さんにも確かなも のとなることが私の今の務めです。 私はしばしばこの点に触れてきまし たが、特にここ数年、多くのところ で教会と教皇に対する批判的な声が 聞かれるようなときには、より執拗 に強調する必要があると思っていま す。自らの血を流してローマ教会を 築いた普遍教会の柱である聖ペトロ と聖パウロの祭日を祝ったばかりで す。この祭日を思うと、教皇との一

致をより確固としたものにするよう 促されます。心から教皇様を愛しな さい。そして多くの人がペトロへの 愛を深めるよう働きかけなさい。

ベネディクト十六世は、最近、一般 謁見のカテケージスで、祈りの力に ついて掘り下げて考察されました。 初代の教会生活の具体的な時期を取 り上げ、当時の攻撃や迫害に対する 信者たちの反応を説明なさいまし た。私たちは皆、ペトロとヨハネが ユダヤ人の最高法院によって投獄さ れ、イエスの名において話さないよ うにと脅されたことを覚えています [iv]。解放されると使徒たちは集 まっていた初代信者に、脅迫された ことを伝えました。教皇様は、この 初期キリスト教共同体について次の ように述べられました。「恐れるこ とも分裂することもありませんでし た。そればかりか、彼らは、一人の 人のように、固く一致して祈り、神 に祈り求めました。(・・・)この試練

のときに、キリスト教共同体は何を 神に願うでしょうか。彼らは迫害の 中で生命の安全を願いません。ペト ロとヨハネを投獄した人々に主が復 讐するのを願うのでもありません。 彼らが願うのはただ、神のことばを 『大胆に語ることができるようにし てください』(使徒言行録4.29参 照)と言うことだけです。彼らは信 仰の勇気を、すなわち信仰を告げ知 らせる勇気を失うことがありません ようにと祈ります。| [v] そして彼 らは、敵からの攻撃にもかかわらず 救い主の力が予見されている詩編2 番を敬虔に唱えつつ、信仰を告げ知 らせたのです。

あの初代信者たちは現代のキリスト者にどう振舞うべきかを教えてくれます。現代もまた、嘆かわしいことに社会生活から神を追い出そうとしたり、少なくとも、私生活の中だけに閉じ込めようと努めたりする人たちがいるからです。信仰年が始まる

10月11日までの間、初代キリスト教 共同体の模範をしっかりと自分のも のにし、楽観的に確信を持って、教 会の必要のため、教皇様のご意向の ため、神の全ての民がそれぞれの司 牧者を囲んで一致するために祈るよ うお願いします。創立者が確言した ことを決して忘れないようにしま しょう。「神は、常に神である。必 要なのは信仰の人なのだ。信仰の篤 (あつ) い人がいれば、聖書の語る 奇跡が繰り返し起こるだろう。『主 の手が短くて救えないのではな い』、神の御手、その御力は弱くな どなってはいない。」[vi]

この確信に促されて、大げさでなく本当に何百万もの人が私たちを待っていることを確信して使徒職を休みなく続けましょう。しかし、聖ホセマリアが力説したように、言葉だけでは不十分です。言葉は必要なものですが、日々、信仰に基づいた、神

の子としての喜びに溢れた〈行動〉 が望まれているのです。

ベネディクト十六世は、もう一つの エピソードも思い起こさせてくださ いました。それは告訴寸前のペトロ が解放されたときのことです。この ときもまた初代信者は心を一つにし て集まり、祈っていました。聖書 は、「ペトロは牢に入れられてい た。教会では彼のために熱心な祈り が神にささげられていた | [vii]と 語っています。聖ホセマリアは、教 会の一致した祈りがいかに聖ペトロ を「ヘロデの手から、またユダヤ民 衆のあらゆるもくろみから | [viii]解 放したかについて、度々、黙想して いました。

『道』の中で、こう思い起こしています。「『使徒言行録』という澄みきった泉の水を飲みなさい。第十二章を読むと、ペトロは、天使たちの働きのおかげで牢屋から出て、マル

コの母の家に向かった。召し使いはペトロが戸口にいると伝えるが、だれも信じない。『ペトロの天使だろう』と言う。初代のキリスト者たちが、どんなに信頼し切って彼らの天使に接していたかがわかるだろう。ところで、あなたは?」[ix]

あなたと私は、信仰をもって、聖なる守護の天使にお願いしているでしょうか。個人的なことにおいて、また心から自分のものとすべき教会の必要なことについて、その助けを借りているでしょうか。使徒職においてその助けを求めているでしょうか。

教皇様はこの場面を説明され、私たちも初代信者のようにすることをお勧めになりました。「日常生活の出来事を祈りの中に置くことができなければなりません。それは、その深い意味を探るためです。初期キリスト教共同体と同じように、私たち

も、聖書の黙想を通して神のことば に照らしていただきながら、見るこ とを学べます。神が、困難なときに も、私たちの生活の中に共にいてく ださることを。全てのことは 一理解 しがたいことも含めて一 最高の愛の 計画の一部であることを。この愛の 計画の中で、善と恵みといのちと神 が、本当に悪と罪と死に最終的な勝 利を収めます。」[x] 別の機会に、 教皇様は個人的な糾明をするように 勧めておられます。「私はどのよう に祈っているでしょうか。私たちは どのように祈っているでしょうか。 私はどれほどの時間を神との関係の ために用いているでしょうか。 [xi]

非常に現代的なこれらのとらえ方は、一日の間に設けた念祷の時間に考察すべきことです。主や聖母マリアとの、また天使や聖人方とのこの対話なくして、私たちは生きることはできないし、また生きようとも望

今の、そして常の〈心配事〉に関して述べてきました。つまり、教会と世の中の生活について、人々のいて、日々の使徒職についての神の子供たちが自分でで、全て考えるべきことであれての国々で広範囲にといるの国々で広範囲にといるのとなって影響を与えている危機のことを窮地に追い込んです。ある人たちを窮地に追い込んで

いるさまざまな障碍の結果を無視し たり無関心であったりしてはなりま せん。失業している人や、家計を月 末まで持つようにするための緊急の 対策を講じるために、最低限の安楽 さのために必要なことさえも放棄し なければならない人たちのことで す。私は、皆さん一人ひとりがすぐ 近くにいるように思い、特に大きな 困難に遭遇している人たちのために 祈っています。統治者や皆が、この 困難な状況からできるだけ早く抜け 出すために必要な手立てを講じるこ とを怠ってはならないのと同時に、 主に信頼し、忍ばなければならない 困窮を喜んで主にお捧げするように 皆さんに勧めます。

同時に、あなた方の専門的な能力に 見合わない仕事に甘んじることをた めらわないでください。いつか自分 の能力を発揮できる機会が訪れるこ とを期待して、受け入れましょう。 悪い時期からも、何らかの利益を得 るよう努めてください。超自然的な 観点で対処することで、人間として 成長し、神との一致を深め、人々と の連帯を強めるのです。

このような状況は、私たちが品位を 失わずに困難を担うため、互いに助 け合うための好機です。ここ数日、 最後の晩餐での主のことばが記憶に よみがえりました。創立者が一生の 間、倦むことなく繰り返したことば です。「互いに愛し合いなさい。私 があなた方を愛したように、あなた 方も互いに愛し合いなさい。互いに 愛し合うならば、それによってあな た方が私の弟子であることを、皆が 知るようになる。」[xiii] また、聖ホ セマリアが、quem diligébat lesus イエスの愛しておられた[xiv]使徒の 晩年のことを思い起こして心を動か されていたことを覚えています。事 実、古い伝承には、聖ヨハネはfilioli. dilígite alterútrum! 子供たちよ、互いに愛し合いなさい[xv]、と繰り返していたとあります。創立者は、きっと年老いた弱々しい声で、そう繰り返していただろうと想像していました。

誰ひとり孤独を感じたりすることの ないように。一人ひとりが、兄弟た ちの祈りと愛情に支えられ、見守ら れていることを意識できるように。 人々との生活が和やかで楽しいもの であるよう、具体的な点で互いに細 やかに仕え合いましょう。難しい時 期を過ごしている人を励ますために は、度々、微笑や愛情のこもったま なざし、当人の悲嘆に心から関心を 寄せ、耳を傾けるだけで十分です。 『道』のあの言葉は何と現実に沿っ ていることでしょう。「愛徳は、 〈与えること〉以上に、〈理解する こと〉にある。」[xvi]

これらの勧めをあなた方の親戚に、 友人や同僚に伝えるようお願いして ペンを置くことにします。いかなる 状況においても父なる神の摂理的な 御手を見出すよう、その人たちを助 けてください。創立者が著作を通し て、聖パウロの「神を愛する者た ち、つまり、ご計画に従って召され た者たちには、万事が益となるよう に働く」「xvii]という言葉を伝え広め たように。主が私たちを召されたの は、皆が、この世のあらゆる小道に 出かけてみ教えを伝えるためです。 Omnia

in bonum! 全ては善のため。

ご存知のように、6月18日、オプス・デイの最初のアシスタント・ヌメラリーのドラ・デル・オヨの列福列聖調査の手続きに当たることになる属人区の審査委員を任命しました。この進展を、私と心を合わせて

三位一体に感謝し、私の意向のため に祈り続けてください。

愛するドン・アルバロを思い起こす ことなしに終わることはしたくない し、そうすることはできません。ド ン・アルバロは、1935年7月7日、オ プス・デイの精神に沿った善良で 実なしもべの道を歩み始められまし た。絶え間ない喜びと戦いに満ちた 神への応答が、何とたくさん思い起 こされることでしょう。

心からの愛を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

バルセロナ、2012年7月1日

[i] 聖ホセマリア、1932年1月9日、 手紙91番。 [ii] 聖ホセマリア、1965年5月11日、 家族の集まりのメモ。

[iii] 聖ホセマリア、1946年6月30 日、本部委員会の息子たちへの手紙 『オプス・デイの創立者』第三巻 45-46ページ。

[iv] 使徒言行録4,1-31参照。

[v] ベネディクト十六世、2012年4月 18日、一般謁見の講話。

[vi] 聖ホセマリア、『道』586番。

[vii] 使徒言行録12,5.

[viii] 同上11.

[ix] 聖ホセマリア、『道』570番。

[x] ベネディクト十六世、2012年4月 18日、一般謁見の講話。

[xi] ベネディクト十六世、2011年11 月30日、一般謁見の講話。 [xii] 聖ホセマリア、『知識の香』174番。

[xiii] ヨハネ13,34-35.

[xiv] ヨハネ13,23.

[xv] 聖ヒエロニムス、『ガラテヤ書 注釈』III,6,10(PL26,462)参照。

[xvi] 聖ホセマリア、『道』463番。

[xvii] $\square - \triangledown 8,28.$

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2012nian-7yue/ (2025/12/16)